

## 『陶淵明に想う』

大蔵省の銀行局がまだ銀行局となる前に、大臣官房銀行課であった時分に、東大出の森俊六郎氏が課長であり、その下に「椿箱」という老係長がいた。白髯をたらし、ベッコウの眼鏡をかけ悠然と椅子にいて書類を閲し、象牙の大印を捺しておられたという。その下に後年東大総長にもなった大内兵衛先生などが若手吏僚としていたという。この椿箱は黒い山高帽を被り、背広の上にインパネス（二重廻しという外套の一種）を着て、悠然と出勤退庁をする。廊下で大蔵大臣の若槻礼次郎氏や高橋是清氏などと出逢うと、どちらにも重に挨拶を交わし合っていたという。一国の大臣と一係長、他に例がなかったとのことだ。

後年、井上哲治郎博士の名著『日本陽明学派の哲学』を読んでいる中に、この椿箱翁の名が、大塩中齋（平八郎）や西郷南洲のあとに出てくるのには驚いた。この椿箱翁については書きたいことがあるけれど、中江藤樹先生が米・油を売って傍ら書を講じていられたのだから、この学派の人にはこのような人がおられるのも当然なのかも知れない。

こんなことをこう書き進んできたが、困ったことがひとつある。実は若海方舟、磯野学申、堀口九万一各先生の驥尾に附して三楽書道会を創立した時分に、何とかして立派な学識・人格を持った人々が集まる会にしようというので、二松学舎の教頭佐倉達山先生のお指図や何かあって、山形県鶴岡市の在に、漢学者・書家として令名の高かった松平穆堂先生を訪ねたことがあった。もちろんこれは三楽の役員にご参加を請うためのものであった。事前に手紙の往復もして打診はしてあり、その往復の筆跡も羲之直系のみごとなものであった。

初夏の午後、ちよど今ごろの時候であった。鶴岡のお宅へ伺うと、今日は山荘の方においでであるとのこと。車を駆ってその方へお訪ねすると、待っておられたような応接をして下さって、何か会の展

望についてお話が出たが、前記の佐倉達山先生は山岡鉄舟の直門で、詩・文・書とも武術とともに、その門流の大事な生き残りであられたことなどが話題に出て、一時間半伝えることは伝えて退出帰京した。ついに返事はウヤムヤ自然延期のようになってしまった。これにはお使いに行った私も大変困って、佐倉先生、若海先生などにも事後策を検討してもらったところ、君が行くと判っているのに、わざわざ山荘に行つてゐるなどは大気どりである。やすやすと出かけるような人材ではない——という意思表示ではないか。あるいは中国へまで研究に行つていたくらいだから、誰々の下では困るの、陶淵明ではないかなど、とうとう向こう様からお話があるまで待つ方が賢明であろうと決つてしまった。今でもあの結末は惜しい気がしている。

ところが一度伺つてお考え願つてきた話が東京でも知れると、あちらの会でもこちらの会でもみんな出かけて瀬ぶみはしていることが判明してきた。当時東京の書壇でひく手あまたの先生となつていた松平先生は、ついにどの会からもあきらめられ、懇請する人もなくなつてしまった。すると先生みずから東京へ移転してきて、世田谷か代々木の辺りだか忘れたが一寓を構えたからとご通知をいただいた。

しかし三楽では、そう気づいた人はいらぬから行くなという。同じ轍を踏んでいるところへ当たつてみると、今時そういう風な人は面倒になるから頼まんにした、と冷やかな言葉を聞かされた。

六、七年すると先生は、鶴岡の門下生と呼ばれて困るからとまた故郷へ帰って行かれた。今になって考えてみると、あの先生は一体どういう人であったのか忘れたが、古い古い時代のズレを感じ、何となく陶淵明を彷彿としてくるのである。

（『書範』、昭和五十七年六月）

『筆間雜記』中村素堂隨筆集（昭和六十三年刊）より転載。